

木村朗子さんによるレポート 2019年11月28日（木）開催

「写真／光をうけとる」トークセッションーもうひとつの写真に触れる

Vol. 4 ゲスト 今井智己さん

今井さんの作品に出会ったのは、今井さん1冊目の作品集『真昼』（青幻舎刊）を手にとった2001年でした。その時に今井さんの作品から受けとった「言葉にならない」印象は、今もって言葉にならないまま、記憶のなかを漂い続けています。

トークセッションの中で今井さんが「写真は物質だけど、ペラペラの薄いものでありイメージなので、作家の見たものがそのままであるとか、作家の思いが写っているというふうに見られやすいところがあって、そういうところがつまらないと思う。作家はこういうふうを考えてこういう状況で撮ったけれど、写真は写真ーとはっきり切り離しておきたい」とお話しくださったこと印象に残りました。

このことは、今井さんが09年から続けておられるブログに「写真の手離れ」という言葉で綴られています。

学生時代に美術史を学ばれた今井さんは、歴史を俯瞰し先人に敬意を払いながら、現在にしっかり両足をつけて作品を生んでいらっしゃると思いました。

今井さんはご自身を「狩人」より「庭師」だとおっしゃいました。

美しい庭はいつも庭師の愛情とともにあって私たちの目を楽しませてくれます。今井さんのお話から、20年以上前に読んだ本にあった「庭師の天国は庭」という言葉を思い出しました。

打ち合わせのときに今井さんの新作プリントを拝見する機会に恵まれ、長い時間をかけて作品を楽しませていただきました。自分が生きている世界、どこかで見たことがあるような風景が写真になっていたのですが、世界をこれほどじっくり眺めることができる写真の力のことを、今井さんの作品をとおして教えていただいたように思います。

木村朗子